

日本語母語話者による初対面会話に用いられる 話題転換ストラテジー

楊 虹

1. はじめに

近年日本語学習者の話題転換ストラテジーに関する研究が見られ、学習者が話題転換表現を正しく理解しておらず、使用できていないことが報告されている(木暮 2002, Nakai 2002)。木暮(同上)はさらに表現形式が正しいのに、不自然な印象を与えるものも見られることから、話題転換表現と話題の内容との関係からの研究も必要と指摘している。これらの研究は主に学習者の話題転換ストラテジーの使用頻度を日本語母語話者と比較するものである。しかし、比較の対象とする母語場面のデータ数が少なく(ともに3組)、このようにデータ数が少ない場合、個人差要因が大きく関わるのが指摘できよう。現時点で日本語母語場面での話題転換ストラテジーを量的に分析した研究は見当たらない。本稿は日本語母語場面での会話において、用いられる話題転換ストラテジーの種類及びその量的使用傾向を明らかにするため、初対面の母語場면을対象に分析を試みた。

2. 先行研究

2.1 話題転換における二つの観点-話題転換のタイプと話題転換ストラテジー

日本語の母語場面の会話における話題転換に関する研究では主に 1)話題転換のタイプ、2)話題転換ストラテジーという二つの観点からの研究が見られる。

1)話題転換のタイプの研究は、導入される話題の内容とそれまでの会話とのつながりから、話題転換のタイプの分類を行うものである。日本語における話題転換のタイプを分類した研究では、南(1981)、村上・熊取谷(1995)、山本(2003)がある。南(同上)と山本(同上)は話題転換のタイプを連続・非連続と大きく2つに分け、さらに下位分類を行っている。村上・熊取谷(1995)は派生型、新出型、再生型という3つに分類した。派生型は連続に相当し、新出型と

再生型は非連続の下位分類である。

2)話題転換ストラテジーに注目する研究は、会話の参加者が話題の転換をどのように示し、また何を手がかりに認識しているのかということについて、具体的な言語・非言語行動に焦点を当てる。本稿は、これらの話題転換という目的を達成するための言語表現や非言語行動を話題転換ストラテジーとする。

日本語の会話における話題転換ストラテジーの研究にメイナード(1993)、前出の村上・熊取谷(1995)などがある。メイナード(1993)は日本語の会話に 1.沈黙、2.まとめや評価表現、3.限られた反応(相づち、くり返し、笑い)、4.転換を示唆する文副詞・接続詞等という4種類の転換ストラテジーが見られると報告している。ここにあげられた4種の転換ストラテジーのうち、主に話題を終了させるためのストラテジーと主に話題を開始するためのストラテジーの両方を含むと思われる。

村上・熊取谷(1995)は、話題が転換されたことを示す言語・非言語行動の特徴を話題転換部における結束性表示行動として捉えており、話題の転換は先行話題を終了させる行動と、後続話題を開始する行動という二つに分けて分析している。本稿は、村上・熊取谷(1995)に従い、話題転換を話題終了ストラテジーと話題開始ストラテジーとに分けて分析する。

2.2 転換のタイプによって異なる話題転換ストラテジー

話題転換ストラテジーの使用は話題転換のタイプによって異なることが指摘されている。話題転換方略を話題間の結束性表示行動と捉えている村上・熊取谷(1995)は、各タイプの転換における結束性の強弱が異なるため、そこに見られる結束性表示行動の特徴も異なるという。具体的には、結束性が弱い転換には「認識の変化を示すことばやメタ表現の使用」等の特徴を持ち、結束性の強い転換には「話題

の前後関係を示す談話標識の使用」との特徴を持つという。しかし、各タイプにそれぞれの結束性表示行動の生起率などの量的集計がなかった。

一方、山本(2003)は話題転換ストラテジーの機能を聞き手の情報処理負荷への軽減というふうに捉え、各タイプにおけるストラテジーの生起数を集計したところ、談話標識の生起数は最も多く、またすべてのタイプに使われているが、メタ発話は主に非連続型に用いられることが分かったと報告している。山本(2003)では、談話標識は談話単位を区切る働きを持つ言語表現とし、接続詞、間投詞、副詞等を入れている。本稿はこれらの要素を分けて分析すれば、それぞれの異なる働きをより明確にすることができると考える。

3. 研究目的及び研究課題

本研究は日本語母語話者の初対面の会話における話題転換ストラテジーを明らかにすることを目的とし、以下二つの課題を立て、分析を行う。

課題1.日本語母語話者は、どのような話題転換ストラテジーを用いるか。

課題2.話題転換のタイプによって、話題転換ストラテジーの使用に相違が見られるか。

4. 研究方法

4.1 データ

日本語母語話者の女子大学生の2者間(11組)の初対面会話を録音・録画し、冒頭から20分の会話を

データとした。参加者に話題の指定はせず、自由にしゃべってくださいとの指示のみである。

4.2 分析方法

課題1については、まず、内容のまとまりを持つ発話連続を一つの話題として区分した。次に話題転換部に見られる話題転換ストラテジーを抽出し、分類を行った。

課題2については、まず話題転換のタイプを連続型と非連続型に認定した。認定の基準は以下の通りである。

連続型：導入された話題が直前の話題と内容上のつながりを持つ、または直前の発話に関連する場合

非連続型：導入された話題が直前の話題及び直前の発話と直接のつながりを持たない場合

そして、①連続型、②非連続型という2つのタイプに分類された話題転換ストラテジーを集計し、使用率を算出し、比較した。

5. 結果

5.1 課題1.話題転換ストラテジーの種類

本研究で見られた話題開始ストラテジーと話題終了ストラテジーを、メイナード(1993)、村上・熊取谷(1995)等先行研究を参考にして分類した結果を表1、表2に示す。

表1 話題終了ストラテジーの定義及び使用率

終了ストラテジー	定義及び例
①相づち	応答として使われるもの以外の相づち詞：「はい」「うん」「そうですか」
②まとめ・評価表現	話題の内容をまとめる発話、または会話の内容等への評価や話者の気持ち、感想等を表す発話 例：面白いですね
③笑い	はっきりとして呼気を伴う笑いや、笑ながら話すもの
④くり返し	相手または自分の発話の一部または全部をくり返す発話、ただい相手の確認を要求する発話は含まない
⑤声小さくなる	それまでの一定した音量より顕著に下がる発話

表2 話題開始ストラテジーの定義及び使用率

開始ストラテジー	定義及び例
①話題を際立たせる表現	a 提題表現：話題となるものの後に「は」、「さー」を伴う場合 例：え、ロシア語はしゃべれますか。 b 列挙、自己引用表現：話題となるものの後に「とか」「って」「ていうか」等を伴う場合 例：サークルとかはいつていますか。

c 繰り返し、倒置表現：キーワードをくり返したり、倒置させたりすることにより、目立たせる表現

例： やったんですか、サークルとか。

②認識の変化を示す表現

会話の方向性が変わったことを示す感動詞または表現

例：「えっ」「あっ」「思い出しちゃいました」

③言いよどみ表現

会話の展開などを示す手がかりとなる緩和表現 例：「なんか」「あのう」

④接続表現

先行話題とのつながりを示す表現 例：「でも」「それで」

⑤メタ言語表現

話題として取り上げられることを示す表現

例：全然話変わっちゃうんですけど

⑥呼びかけ表現

相手の名前等呼びかけて注意を引く表現

5.2 課題2. 転換のタイプ別に見た話題転換ストラテジーの使用率

全部で 91 回の話題転換が見られ、そのうち、連続タイプは 61 回で、非連続タイプは 30 回だった。この 2 つのタイプにおける各転換ストラテジーの使用率を比較した結果、連続型と非連続型では、多用されるストラテジーの順位はほぼ一致しているが、ストラテジーによっては、両タイプ間では、使用率に大きな差が見られたものもある。

まず話題終了ストラテジーを見てみよう。

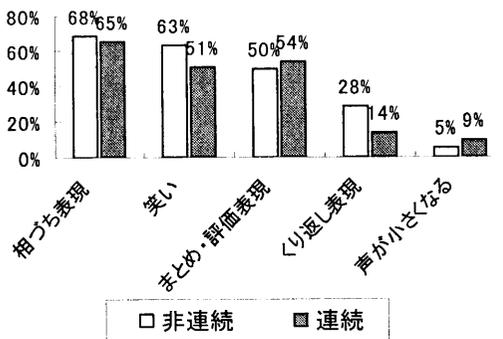


図 1 タイプ別の終了ストラテジーの使用率の比較

話題終了において、全般にわたり、ストラテジーの使用率が高く、会話の参加者が相互に複数の話題終了ストラテジーを用いて話題終了の確認を行っていることが窺われた。

非連続型転換での使用率が高いのは、相づちと笑い、くり返しである。この 3 つのストラテジーはともにメイナード(1993)では限られた反応にまとめられるもので、話題を発展させる働きを持たず、主に相手にターンを譲ることにより、話題を終息へと

導く。相づちは転換のタイプにかかわらず話題終了に最も頻繁に見られるが、くり返しの場合、現在の話題にこれ以上話すことがないというより強い終了のシグナルとなるため、非連続型へと転換する機会が多いと推測される。一方、笑いも話題の終わりに冗談等と言って、オチをつけて締めくくるという役割も果たすため、関連性を持たない話題が比較的導入しやすくなっているのではないかと推測される。

一方、連続型転換での使用率が高いのはまとめ・評価表現と「声が小さくなる」である。まとめ・評価表現は連続型での使用率が非連続型よりわずかに高かった。連続型話題は、しばしば先行話題の評価表現をきっかけに、先行話題本来の焦点からはずれ、評価表現のみに関連するような発話により導入される。そのため、連続型転換でのまとめ・評価表現がやや多く見られると推測される。また、「声が小さくなる」は、比較的非明示的で、非連続型転換においてはより明示的なストラテジーを選択するため、使用率が低いと考えられる。

次に話題開始ストラテジーについて見てみよう。

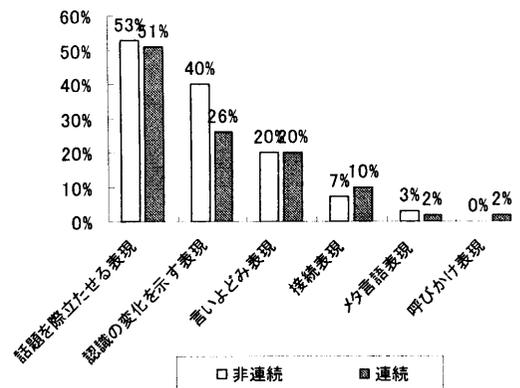


図 2 タイプ別の開始ストラテジーの使用率の比較

転換のタイプによる使用率の差が見られなかったのは話題を際立たせる表現、言いよどみ表現である。話題を際立たせる表現のうち、「は」のような提題表現のほか、「とか」「って」のような話題を際立たせると同時に、これらの表現が持つ不特定性や不確かさにより、話題導入に対する躊躇の気持ちを相手に伝える働きを持つストラテジーも多く見られた。また、言いよどみ表現に見られる「なんか」も根本的には不確かさを持つ言葉である(鈴木 2000)。これらの表現が転換のタイプに関わらず多用されていることから、日本語母語話者は相手の会話の流れへの理解を配慮すると同時に、相手の反応を窺いながら話題導入を行っている姿勢が見られた。

非連続型転換での使用率が大幅に高いのは「認識の変化を示す表現」である。認識の変化を示す表現は「え」「あ」等話し手の内部情報処理状態の表れで、「え」は、話題間の関連性が低いことを示し、「あ」は発見・思い出しを示す手がかりである(田窪・金水 1997)。本稿では、「え」の使用が圧倒的に多かった。「え」は連続型に多く見られる一方、先行話題と全く関連性のない非連続型にも多数見られた。非連続型話題の導入に「え」を使うことによって、聞き手にあたかも導入される話題が前の話題となんらかの関連性を持つかのような印象を与える。

一方、本稿では、接続表現とメタ言語表現、呼びかけ表現の使用率が低かった。接続表現では、従来話題を転換する機能を持つものとして、「ところで」、「さて」、「じゃ」等が指摘されているが、本稿では、「でも」という接続表現しか見られなかった。「でも」は従来「論理的結合関係」で、「反対、単純な逆接」機能を持つ接続詞と分類されているが(市川 1978)、近年その談話標識としての役割も注目され、話題間の関連性を示す機能が指摘されるようになってきている(林 1999)。本稿では初出の話題を先導する「でも」が見られ、非連続型話題の導入にもなんらかの関連性を示すストラテジーを用いる日本語母語話者の話題導入の傾向が窺われた。

メタ表現や呼びかけ表現は全データにおいてそれぞれ2例と1例しか見られず、初対面の会話においても、日常会話ではほとんど用いられないことが

分かった。

6. まとめ

本研究は日本語母語話者の初対面会話の話題転換に焦点をあて、話題の開始部及び終了部に用いられるストラテジーを話題転換のタイプ別に分析し、その使用傾向を明らかにした。

その結果、話題終了については、日本語母語話者がターンを相手に譲るストラテジーを中心に相互に複数の話題転換ストラテジーを用いて、話題終了に関わっていることが示唆された。話題開始については、日本語母語話者の話題導入には、相手の会話の流れへの理解を配慮すると同時に、相手の反応を窺いながら話題導入を行うという姿勢が見られた。

参考文献

- 市川孝(1978)『国語教育のための文章論概説』教育出版
- 木暮律子(2002)「日本語母語話者と日本語学習者の話題転換表現の使用について」『第二言語としての日本語の習得研究』5, 5-23.
- 鈴木佳奈(2000) 会話における「なんか」の機能に関する一考察. 大阪大学言語文化学会, 9, 63-78
- 田窪行則・金水敏(1997)「応答詞・感動しの談話的機能」『文法と音声』くろしお出版,257-278.
- 林淑璋(1999)談話の一貫性と話題展開—「でも」と言う談話標識を用いた会話分析—, 平成 11 年度日本語教育学会秋季大会予稿集 123-128.
- 村上恵・熊取谷哲夫(1995)「談話トピックの結束性と展開構造」『表現研究』62号, 101-111.
- メイナード, K. 泉子. (1993) 『会話分析』くろしお出版
- 山本綾(2003) 話題転換についての一考察—アメリカと日本のテレビのトーク番組を資料として—『えちゅーど』33, お茶の水女子大学大学院英文学会.
- Nakai, Y. (2002) Topic Shifting Devices Used By Supporting Participants in Native/Native and Native/Non-native Japanese Conversations, *Japanese Language and Literature*, 36, 1-2 6.

やん ほん／お茶の水女子大学大学院国際日本語専攻

ttn82rd23y@mx8.ttcn.ne.jp